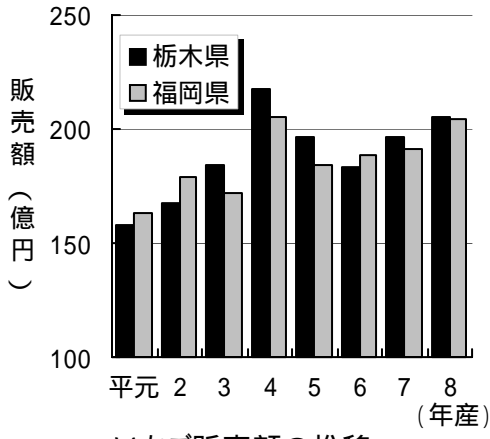


いちご王国、日本一を奪回せよ！（上）

いちご「いちご」とちおとめ」の育成と普及

「いちごといえば栃木県」といわれるように栃木県は誰もが認める「いちご王国」。昭和三十年代初めから本格的に栽培が始められ、昭和四十七年以降日本一をキープしてきました。しかしながら、平成の時代に入り、元年、二年、六年と三度にわたってライバルの福岡県に日本一の座を譲りました。



いちご販売額の推移

今回は、新品種の育成で日本一を奪回し、いちご王国を死守した「いちご育種」のプロジェクトを紹介します。

いちご王国陥落

平成元年春、栃木県は十七年間維持してきた「いちご生産日本一」の座を福岡県に明け渡した。

農業試験場栃木分場野菜特作部（現いちご研究室）のリーダー高野邦治はこの事実を重く受け止めていた。「東の横綱女峰では福岡県に勝てない」。高野は女峰に代わるオリジナル品種の開発を最重要課題とし、同年秋、新たな品種施設建設の予算を要求した。予算は約二億円。新品種の生まれる確率は数十万分の一。毎年交配実生を一万個体栽培しても十年以上を要する。実生苗をいくつ作れるかが早期品種開発のポイント。年に一万以上を栽培できる施設が必要と考えた。しかし、最終予算は一億一千万円。この施設ではせいぜい三千の実生苗しか栽培できなかったが、女峰育成のご褒美と産地間競争に負けた危機感から予算化

してもらったと感謝し、この施設で頑張ってみようと思った。

平成二年二月、栃木市吹上地区の生産者と共に福岡県に視察に行った栃木農業改良普及センター（現下都賀農業振興事務所）の大貫文男が栃木分場を訪れた。「福岡県ではポストとよのかを目指し新品種開発を始める。しかも育種圃場は一ヘクタール、実生で二万も栽培する」と話した。青ざめた高野に大貫は、「生産者は女峰を超える新品種を望んでいる。育種の圃場は吹上地区の生産者が提供できる」と話を続けた。高野は熟慮の末、この申し出を受けた。この直後、高野は育種担当の石原良行に実生数で一万になるように交配の指示を出した。

同じ年、栃木県では女峰が百%作付けされ、反収三トン、三百万円をほぼ達成し、いちご生産は順調だった。しかし、販売額は福



実生株を選抜する石原(左)と植木(右)

岡県に十一億円の差をつけられ、二年連続で二位となった。

90-12-25

平成二年夏、石原は七千余の実生苗を養成し、農業士の大出久雄、高久八郎が用意したハウスと栃木分場内の温室に植え付けた。果実が色づき選抜が開始された。

栃木分場に植えた「久留米四十九号×栃木十一号」の組合せ五百十九株の中に、花梗が指を広げたとように真っ直ぐ伸び、果実は円錐形で葉柄や葉の形など草姿がきれいな株を見つけた。果実はオレンジ色、硬くわずかな酸っぱさを感じるだけで甘みはあまりなかつ



系統「90-12-25」(後のとちおとめ)

だが、不思議な魅力があった。石原は迷わず選ぼうと考え、春先株元から伸びたランナーを五株受け、系統名を「90-12-25」とした。最大のいちご需要期である十二月二十五日にちなんで。

新品種開発プロジェクト

二年続けて二位になった翌年の平成三年二月、新品種開発プロジェクト「いちご育種検討会」(以下育種検討会)がスタートした。構成メンバーは育種圃場提供者、普及教育課、首都圏農業課、栃木農業改良普及センター、県園芸特産振興協会、県経済農業協同

組合連合会、農業試験場。生産、行政、普及、流通・販売、研究に携わる者が一同に会した機能集団で、「日本一奪回」のために関係者が結束。初めての試みだった。

平成四年二月、第二回育種検討会で90-12-25を大出、高久が試作することを決めた。試作の結果、生育は女峰と同様だが、女峰にはない甘み、酸味と食感、果実の大きさが高く評価され、育種検討会の中で90-12-25を試作から三カ所の現地試験に移すことを決定した。平成五年三月、現地試験において90-12-25の優秀性が再確認され、「栃木十五号」の系統名を付けた。番号は新品種の予感と期待を込め、語呂のいい15(「いちご」とした)。

新品種誕生

平成六年二月の育種検討会。栃木十五号は、大果で食味が良い、収量性もあるなど期待する意見が多く出された。一方、栽培の仕方によつては中休みする、生理障害や果実の傷みがみられる等の問題点が指摘された。そして「女峰に



いちご育種検討会の様子

生みの親、育ての親

栃木十五号の開発期間は、平成二年の交配から平成六年の種苗登録出願まで、四年と極めて短い。女峰は交配から十一年、とよのかは十年。奇跡と言っていい程その短さが際立つ。

その理由はとちおとめには育ての親がいたからである。栃木分場で交配した種から90-12-25が生まれた。それを栃木十五号、とちおとめとして育てたのは、いちご育種検討会のメンバー、試作農家、普及員、JA職員、流通関係者、消費者である。それぞれの立場で役割が分担され、その機能がフルに発揮された結果、短期間で新品種が開発できた。それは偶然ではなく必然であったのかもしれない。

(以下次号へ続く)

(追記)とちおとめの育成に対して、平成十一年三月に石原良行、高野邦治、

栃木博美、植木正明が知事表彰を受けた。また、実生選抜から協力した故大出久雄、高久八郎氏には知事感謝状が贈られた。

(敬称略)

「農業試験場」